

児童文学研究—その(2)—

児童詩と想像力

高 山 浩 子

1 児童文学のジャンル

児童文学といっても、その範囲は広く、一般の文学にやや近いジャンルがある。しかしながら大別すると、一般の文学の場合と同様に詩と散文に分られる。ここでは詩は子供向けに書かれた、子供の心情に一致する詩を意味し、それにメロディが付けられた童謡をも意味することがあり、ここで言う散文とは子供が理解できるように易しく書かれた、小説や物語のたぐいが主なものである。

ピーター・ハントによれば、児童文学が教訓的 (didactic) なものから娯楽的 (recreational) なものに大きく変容したのは1850年頃からであるという。そして1950年頃になって、さまざまな主題を持つ多くの領域へと発展して今日に至っていると述べている。¹⁾ さらに彼は、児童書に関連する主題として、詩の本、絵本、教育的な本、おとぎ話の4種類のを挙げている。²⁾

実際に古くからの子供向けの本は、何らかの形でリズムのあるものが多かった。子供には息の長い文章は苦手であり、短く明白な文章が喜ばれる。したがってリズム感があって覚えやすい詩文の方が、歓迎されるのであろう。

児童のための詩の種類としては、純粋に詩的情感を伝える児童向けの文学的叙情詩と、メロディを付けて歌うことで詩の内容を表現する目的のものがある。前者はもちろんメロディに載せて歌うことも可能であるが、通常、詩として鑑賞する。後者は伝統的な童謡として伝えられることが多い。

児童のための詩を、ここでは児童詩と呼ぶことにしよう。一般に児童詩は、文学的な才能のある大人が子供が読むことを念頭において書いたものである。もちろん大人が読んで子供頃の情感を呼び覚まして、文学的な叙情をもたらしてくれるものであろう。子供は子供の言葉で表現するが、受容するのは必ずしも彼等の使っている言葉だけではない。そこだけに留まってしまうと、さらに高度な言語の習得もできないし、新しい単語も獲得できず、表現が停滞してしまう。子供は絶えず何かを経験し、修得し、獲得していくものである。したがって、現在の状態から、さらに背伸びをして言葉を覚えていくものである。

次に、児童書といわれるもののうちで、詩はリズムカルで覚えやすいために、詩集の形で本になっていることが多い。もちろん一冊の本が長編詩であってもおかしくはないが、多くの場合、児童詩は短いものがよく読まれる。児童書の詩の物語には、その内容の理解を助長するために挿し絵が好まれるが、これも児童詩の特徴のひとつと考えられる。

児童詩に対立する児童用物語は、その内容は多岐に亘り、実に多種多様であって、いろいろなヴァリエーションがある。昔話やおとぎ話もあり、また童話のたぐいも古今東西実に多様である。やや大きな子供たちのためには、少年少女小説などと言われるものもあり、大人のための小説にたいへん近いものがあるが、これは小説の主人公がたまたま子供であることが、その呼び名の所以となっ

ている。

そこでまず、児童詩の問題から考察することしよう。

2 児童詩の輪郭

カーペンター (Humphrey Carpenter) とプリチャード (Mari Prichard) の編纂になるオックスフォード版『児童文学辞典』(*The Oxford Companion to Children's Literature*) によると、イギリスでは古くから詩は子供たちに教えたり、子供たちを楽しませたりする方法として、使われてきており、多くの童謡には古い起源があり、伝統的なバラッドも、子供たちの読み物として重要な役割を果たしてきたという。³⁾

一般に児童詩は、海外にも日本にも多くみられる。イギリスにおける児童詩の一例として、スティーヴンソンの『子供の詩の園』(*Child's Garden of Verses*) を挙げることができよう。これは彼が1885年に表した本で、北国スコットランドの子供たちの日常生活経験を単純な詩に表現したものである。スティーヴンソンは1850年の生まれであるから、これを出版した年には、彼は35歳の大人であったが、詩の対象はあくまであどけない幼児であろう。

この詩集は、作者の幼年時代の思い出がモチーフとなっていることは確かであろう。この詩集には、子供の感情と想像力がよく描出されている。雨や風、太陽や月や花、お天気や動物など、子供が直接目で見たり経験したりするものが主題になっていて、これを読むどんな子も、ここに書かれたことを馴染みあるものとして、追体験できるであろう。またこの詩集には、眠りの国のことや妖精の話など子供の想像力を掻き立てるものがあり、この詩から子供たちの共感を引き出すことに成功していると思われる。

この詩集にはまた、地域に密着したものもある。高緯度にあるスコットランドは、夏はいつまでも陽が沈まず、冬はこれとはまったく反対で、昼の時間が短い。そういう情景をうたったものに、「夏の寝床」('Bed in Summer') がある。

In winter I get up at night
And dress by yellow candle light.
In summer, quite the other way,
I have to go to bed by day.

I have to go to bed and see
The birds still hopping on the tree,
Or hear the grown-up people's feet
Still going past me in the street.⁴⁾

この詩に見られるように、北国の子供が体験する想いを、この詩は如実に表現している。つまり作者は、ここではまったく子供の気持ちになってうたっているのである。子供の気持ちをそのまま大人が表現するのは難しいことであろう。多くの大人は、それまでの時間的経過のうちに、子供の頃に多量に持っていた自然を純粋な気持ちで見える力を、ほとんど失っているからである。その理由は、生活の疲れによるものであるとか、富みに対する価値判断の変化であるとか、雑多な体験による純粋さの喪失であるとか、さまざまな意見があらう。

スティーヴンソンよりやや前の世代のワーズワスは、そうした子供の純粋な気持ちを、あの有名な詩の中で、こううたっている。

My heart leaps up when I behold
A rainbow in the sky:
So was it when my life began;
So is it now I am a man;
So be it when I shall grow old,
Or let me die!⁵⁾

ワーズワスは子供の純粹さを大人になっても持ち続けた数少ない詩人のひとりである。子供の頃に虹を見て感動した気持ちは、生涯持ち続けたいという想いがこの詩には込められている。

こういう大人たちによって作られた児童向けの詩は、やはり同様な感性の持ち主である児童には、理解しやすいものになる筈である。ワーズワスとはくに児童詩はつくっていないが、児童を主題としたものは残している。たとえば、「私たちは七人」(‘We are Seven’)という詩は、主人公の残された小さな女の子の想いを綴った詩であると思われるし、「白痴の少年」(‘The Idiot Boy’)という詩は、母親と知恵遅れの少年との愛情の物語である。これらの詩は、大人の読者を対象としているように思われるけれど、少なくとも子供の感情と思考を描出している点では、少なからず児童詩と関わりを持つように思われる。とくに「私たちは七人」は、子供の読者にも理解できるものであろう。

3 児童詩と絵本

クリスティーナ・ロセッティ (1830-1894) は、子供の信条を見事に描き出した作品を多く残し、子供たちに愛された詩人である。彼女は詩人でありラファエル前派の画家の一員である、兄のダンテ・ガブリエル・ロッセティに刺激されてか、可愛らしい絵を多く残したが、とくに彼女の詩集は添えられたきれいな絵と共によく鑑賞されている。いまでも大英博物館の土産売り場で、クリスティーナの可愛らしい小型の絵本が、来客の興味をそそっている。

一般に絵本は、児童書のひとつと考えられている。物語の内容を視覚的に捉えることによって、その情景を一層具体的に把握することができる。物語の内容を正確に伝える方法のひとつとしても、挿し絵は効果的なものと言える。この際、もちろん話の内容が重要であって、絵そのものには、話の内容にあるイメージを抱かせる効果があるし、内容の理解に役立つことも確かである。

受け手としての児童は、視覚映像を掴むことによって、話の内容に明確な輪郭を持つことができる。このような挿し絵による理解を助ける効用は、補助的なものであると思われるが、実は漫画のように、絵そのものが視覚的理解を目的として、文字が絵に描かれたことは、その映像を理解するための補助であるかのような作用をする場合がある。このような混乱は、絵本が主として文字を理解するものか、それとも絵を理解するものかという、問題に収束する。

ここでは、絵本とは「絵を主体とした児童用読み物」という広辞苑の定義を採用して、絵によって主たる情報を提供する本のことでありとしよう。そうすると絵本は、絵によって表現された映像を、文字によってさらに理解を助けるようにするものであると考えられる。その極端な例が漫画であると思われる。

ベアトリックス・ポッターは、『ピーター・ラビット』にきれいな可愛い絵を添えて小型の本として世に出した。そもそもこの本は友人の子供に、絵付きの手紙を送ったことに端を発した。それゆえ、最初から絵本の構想を持って書かれたものであり、その内容からして児童詩を意図したものではないように思われる。もちろん子供に夢を持たせる読み物であるがゆえに、叙情的で楽しい物

語であるが、これを児童詩の範疇に入れるわけにはいかないであろう。児童詩はあくまで詩文の形をしていなければ、児童詩とは呼べないのである。

また日本では岩崎ちひろの絵は可愛らしいし、子供が親しみやすく分かりやすいし、子供が好む種類の絵であるが、詩情を漂わせている詩とはいえない。

『車輪の下』や『郷愁』や『春の嵐』などの作品で日本でも若者の間でよく知られているドイツの作家ヘルマン・ヘッセは、自分の詩集に自ら絵を付したが、これはその対象がむしろ大人であるがゆえに、やはり絵付きの児童詩というわけには行かないであろう。そう考えると、児童詩に絵のあるものは限定されてくる。

ところで、詩集に後から付した挿し絵は、詩の内容の理解を助けるものと考えられる。したがって、この場合は「挿し絵入りの児童詩集」という種類のものであると考えて、まず間違いあるまい。

クリスティーナの詩の本は、後者の種類の本であると考えられる。明らかに子供を対象としているのであるが、その可愛らしい絵ときれいな言葉の配列は、多くの大人を魅了している。子供向けの詩集ではあるが、とくに女性に人気のある本になっている。クリスティーナはやはり、大人になって子供の持つ純粋な目を、生涯持ち続けた詩人である。

彼女の代表的な詩には、日本でも知られているものがある。とくにそのうちでも、「風」(‘The Wind’) はよく知られている。

Who has seen the wind?
Neither you nor I:
But when the leaves hang trembling
The wind is passing thro'.⁶⁾

この詩は子供が日常体験する自然現象のうちで、木々の葉を揺すりながら吹いている風に注目して、風に対する素朴な子供の感じ方を、そのまま詩にしたものである。日本でもこの詩にはメロディが付けられて、童謡としてもうたわれることが多い。小学校の唱歌のひとつに数えられているものもある。童謡と考えるか児童詩として考えるかは、どちらに重点を置くかによる。

クリスティーナの自然に対する易しい感受性は、彼女の作品の随所に現われているが、それはこれを読む児童にも容易に追体験のできるものである。なぜならば、彼女は児童と同様の純粋な感受性で受容し得たものを詩にしているからであり、感受性の純粋で観察力の鋭い児童からすると、共感しやすいものだからである。

4 児童詩と想像力

児童詩には、ときどき日常性からの飛躍がある。通常の世界では生じないような描写を児童詩では行なうことがある。そこには普段は見かけない経験もしない、想像の世界の描出がある。つまり作者としての詩人の想像力の世界が現出されるのである。現実世界と想像の世界との乖離は、日常性の中からは生まれてこない。それは詩人の頭脳の中の世界で生じる現象である。

クリスティーナ・ロッセティは、そういうような想像力豊かな詩人である。彼女のえがく世界は、たとえばその詩集の冒頭にある『ゴブリン市場』(Goblin Market)などは、その代表的なものである。そのほか彼女の想像世界から描出された詩が、数多く存在する。

クリスティーナのような純粋な感受性と豊かな想像力を以て詩を書いた女性の詩人が、かつて日本にも存在した。ここでは、その作品を検証してみよう。クリスティーナの場合と同じ題名の「風」と題された次の詩は、その詩人の想像力の豊かさを子供と共有していると考えられる。

空の山羊^{やぎ}追ひ
眼に見えぬ。

山羊は追われて
ゆふぐれの、
曠野^{ひろの}のはてを
群れてゆく。

空の山羊追ひ
眼に見えぬ。

山羊が夕日に
染まるころ、
とほくで笛を
ならしてる。⁷⁾

日本には山羊は多くはいない。大正年間に山羊の飼育が盛んに行なわれたという話は聞かない。少なくともこの頃、日本で羊毛を採る習慣も、山羊の肉を食べる習慣も日本にはなかった。したがって、草をはみながらのどかな草原を彷徨する山羊と、山羊の群に付き添いながら遠くで角笛を吹く牧童の情景を、この詩人は心の中で描き、それを空に投影しているのである。山羊と牧童の物語は、多分、西洋の本に出てくる一場面であろう。詩人がどこかで読んだものが、ここでのモチーフになっているに相違ない。

この詩人は、当時の日本には珍しく、クリスティーナ並みの感覚で自然を眺め、豊かな想像力を働かして、純粹な感性で詩作をしている。この詩人の描く世界は、子供にはすこぶる理解し易いものであろう。

次の詩は、まさに詩人が幼ない女の子の気持ちに成り代わって、その詩的感情をこうたい挙げている。

夜は、お山や森の木や、
巢にゐる鳥や、草のはや、
赤いかわいい花にまで、
黒いおねまき着せるけど、
私^{わたし}にだけは、できないの。

私のおねまき白いのよ、
そして母さんが着せるのよ。⁸⁾

夜が山や森や木々に黒い寝間着を着せるという表現は、子供の豊かな想像力で可能となろう。普通の大人たちには思いつかないし、また現実を追われている大人には想像もできない。大人が成人する過程で世のさまざまな慣行と伝統と欲望のために失ってしまったものを、子供は純粹な形で持っている。それは素朴な感受性である。そうした見事なばかりの素朴で純情な叙情性を描出したこの詩人の名は、金子みすずと言った。

幼児の心情で、素直で率直な表現ができる詩人はそう多くない。日本でも児童文学が栄えた大正後期から昭和初期には、西条八十、野口雨情、北原白秋らの、主として男性詩人の中であって、彼女は小さな宝石のように輝いていた詩人であった。これらの男性詩人たちが、児童詩の発展に貢献したことは知られているが、若い女流詩人金子みすずは、その中であって、ひたすら自己の純粹世界を童謡という形で詩的に表現していた。

このように、児童詩の世界はイギリスでも日本でも、極めて類似した感性のもとに展開されていった。児童詩の問題はこれまであまり論議されなかったが、それは児童詩が児童によって読まれなくなったからであろう。それというのも、子供を育てる親が、とくに母親が、幼児に本を読んで聞かせることを以前ほど多くはしなくなったことによるであろう。それには、文字から絵本への時代的な変化が背景にあるし、一方では、読書よりもテレビの方が好まれるという事実があるが、この事実がまさに児童の児童詩からの離反を加速しているように思われる。

子供が詩を読まなくなった、あるいは母親が子供に詩を読んでやらなくなったということは、これから成人していく者に想像の世界を見せていないことを意味する。想像力の欠落は、物事を深く考える思考を阻害し、創造性を育むことがない。そうすると即物的で深遠な思考に欠ける、浅薄な人間を作り出すことになる。現代社会がもっとも恐れていることのひとつ、つまり直情的でその場限りの思考しかできない人間を輩出することになる。幼年期や児童期の叙情教育は、本来的に重要な問題であり、その根底に想像力教育の欠如があると言える。

このことこそが、児童教育の重要な課題である。つまりそれは、現在、子供の頃に詩を通しての叙情性を育むことの重要性が声高に叫ばれる所以である。

5 児童詩の性質

これまで述べてきたことから分かるように、児童詩は児童の精神的な成長過程にたいへん大きな作用をもたらすものである。児童詩の文学的な役割を考えることは、それによってもたらされる効果をも含まれる。つまり児童詩は児童に対して文学的感受性を涵養すると同時に、情諸面でも教育効果が得られることである。児童詩の純粹な世界は、子供に情緒面での一種の教育環境を提供する。

人間の情緒や感性は、幼児期の環境や体験に大きく左右される。フロイトは三歳までの幼児の知的・感性的経験が、長じてからの個性の形成に大きく関与するという意味のことを言っている。実際に、幼児期に母親が子供に十分な栄養、ここではとくに知的栄養、を与えることが、人間形成に大きく関与することは確かなことである。それには児童詩の果たす役割が大きい。

このように児童詩といわれるものは、幼児の大切な感受性や叙情性を涵養するのに大きく関わっている。その性質のうち、主なものを挙げれば次のようなものがある。

- 1 児童詩とは、読者として子供を対象とした詩である。ただしこの場合の子供には、単に児童だけでなく、幼児も学校の生徒も含まれると考えられる。
- 2 児童詩は、子供によって理解されなければならない。
- 3 児童詩は、子供に分かるような易しく明確な言語で書かれていること。
- 4 児童詩は、主題に邪見や余念が入らず、子供の純粹な感性を刺激するものであること。
- 5 児童詩の作者は、ほとんどの場合、子供の感情を理解している大人、あるいは子供の感性を持ち続ける大人である。
- 6 児童詩は、十分に文学的な価値を有し、園児・児童・生徒などの情緒の涵養に役立つものであることが望ましい。
- 7 児童詩は、大人の鑑賞にも十分に耐えられるものである。

8 児童詩は、文字の読めない幼児にも、大人が読んで聞かせて理解させられるものであることが望ましい。

このような視点から、児童詩を見ていくと、児童詩は東西を問わず児童の情緒面での良い教育環境の形成に、大いに役立つものであると言える。すなわち児童詩の役割には、子供の頃の安定した情緒の形成において、大きなものがあると言える。

わらべ歌は昔から伝えられている歌である。子供が歌うことが通例のものであるから、やはり児童詩あるいは児童文学の範疇に入れて考えても良いものであろう。昔の子供は、遊びの時によく歌っていたものである。縄跳びや石蹴りや輪になってする遊技の一種にも、わらべ歌は盛んに歌われてきた。

古典的な形式で書かれた児童詩には、メロディが付けやすい。現代詩のように字数がバラバラになるとメロディには載せにくいのである。その点五七調や七五調はまことにリズムが採りやすいので、昔から詩歌として歌われてきた。

視聴覚技術が発達し、児童が活字から離れていく傾向があることは、児童詩を通しての情緒教育にはマイナスの効果である。しかし現代にあって、児童・生徒の情緒が不安定になりやすい時期に、児童詩が展開する純粋な感情に満ちた文学世界は、やはり子供の安定した情緒形成にはもっとも望ましいものであろう。今後こうした詩による情緒教育が一層見直されていくことが、現在、もっとも望まれることであろう。

注

- 1) Peter Hunt, *An Introduction to Children's Literature* (Oxford: Oxford University Press, 1994), p. 9.
- 2) Loc. cit.
- 3) Humphrey Carpenter and Mari Prichard, *The Oxford Companion to Children's Literature* (Oxford: Oxford University Press, 1999), p. 416.
- 4) Robert Louis Stevenson, *A Child's Garden of Verses* (London: Collins, 1966), p. 35.
- 5) William Wordsworth, *Selected Poetry* (New York: The Modern Library, 1950), p. 462.
- 6) Christina Rossetti, *Christina Rossetti's Poetical Works*, ed. William M. Rossetti (London: Macmillan and Co., Limited, 1924), p. 438.
- 7) 金子みすず著『金子みすず全集Ⅱ 空のかあさま』矢崎節夫他編 JULIA社 1984年 p. 61.
- 8) 同書 p. 60.